

村研三十周年記念事業に関する

アンケート調査結果報告

二、共通課題に関する意見

①課題名 ②副題 ③付帯意見

○①「村落研究の戦前・戦後」

②一、村落研究の現代的課題にふれて――

――現状分析とその方法をめぐって――

――村落実態分析の課題と分析方法について――

③過去、現状の編年的フォローと課題的フォローとを含むような内容で。

(以上五名)

○①「日本資本主義と村落」

②一、村落社会研究三〇年の総括――

③将来への展望に力点を置く。資本主義の生成、確立、変化と段階別に報告し、農地改革後の変化についても、農地改革から農基法まで、以降高度成長期、生産調整下にはっきり区分して歴史的視点を明確にする。

(以上三名)

○①「村落社会研究の五〇年」

○②一村研三〇年の総括—

○①「村落の変貌と村落社会研究」

○②一村落社会研究三〇年の歩みをふまえて—

○③対象としての村落の変貌とそれに対応した研究史を時代区分をもとに、二報告。とくに現状の問題については現在の研究の流れを二報告。

(以下各一名)

○①「村落研究の歴史と今日的課題」

○③大会時には、歴史的段階に分けて報告の構成をし、『別冊』において“柱別”（資本主義と農業、文化としてのムラなど）に構成する。

○①「村落社会研究の現状と課題」

○③現代の農村・農民問題ということに焦点をあて、地域社会研究の方法論・理論を確立していくという方向性のもとに農村生活についての接近を考える。

○①「村落研究の現代的意義」

○③問題関心を鮮明にして、それを具体的な素材にそくして述べる。
村落研究の方法論的再検討を含めて。

○別に意見だけのものとして

○視点として、「新しい村落像を求めて」といったような前向きの要素を加えてほしい。

○村研三〇年の研究水準（当然、村研が発足時点において前提としていたそれ以前の研究をふまえる）を含みつつ一つまり研究総括だけでなく、総括した上で—新たな課題と展望を示す報告を組む。

二、三〇周年記念事業に関する意見

①大会日程について

○自由報告なしで二日。

○自由報告を含めて二日。

○大会日数がのびるのは、会場設定の問題等が解決されるのならばやむをえない。

○共通課題報告二日。自由報告一日。

○自由報告第一日 九時—五時
記念大会第二日 九時—四時（三時）

○公開座談会（講演会） 第一日

⑤『年報』について

○『年報』は共通課題報告のみとし、自由報告は省略する。

- 特別号に関しては、テーマ別・理論的柱別に多面的に編集するか、あるいは段階別柱の編と理論的柱の編との二本立てといふ)

○課題委員会、編集委員会の指名による報告者たちと共に、同じ題のもとで公募もする。

- 自由報告は必要だが、今年のようなタイト・スケジュールでは内容について行けず、かえって無意味ではないか。一年だけ休んでもよいのではないか。
- 課題報告を中心にして報告者をしぼり、討議内容を豊かにするため自由報告は最少限度にとどめる。

③記念講演会について

- 講演会はなくともよい。やれればやってもよいが、大会開催地による大会への集結の成果を中心に考える。

- 広く理解を求めるため『公開シンポジーム』を考えては如何。

④回顧座談会について

- 実施し研究通信に掲載する。
- 実施しなくてもよい。

⑦その他

○近年、参加がみられなくなった民俗学、史学、法学等の参加が積極的に図られるよう配慮願いたい。

- ここ数年の大会報告をふりかえると、日本農村社会についての実に緻密な報告と検討を聞いてきたと思いますが、そこに何かもどかしさを感じていました。それは今日の日本の農村社会が持つ（世界、というより、いわゆる発展途上国と比較して）特殊さ、農地改革が完了したこと、工業化により、農外所得の大きなチャンスを有していることとの主張が薄いため

⑥『研究通信』について

- 『年報』（初期より）の総目次、および『研究通信』総目次を特集号として発行。

○回顧座談会を掲載する。

ではなかろうかと思われます。諸外国の農村の現状との比較のもとに、日本の農村社会、農業の持つ意味をダイナミックに浮かびあがらせていく努力をなしていくべきだろうかと考えます。